卒業生調査にみる本学におけるキャリア教育への示唆

筑波技術大学　障害者高等教育研究支援センター

石原保志

要旨：平成 19 年度に実施した職場適応に関する本学卒業生対象調査のうち、「後輩に対するアドバイス（自由記述）」の回答を分析した。記述内容を分類した結果、コミュニケーション態度・方法・技術、エンパワーメント、セルフアドボカシーに関する件数が上位を占めた。この結果から、本学におけるキャリア教育において、これらの内容に重点を置いた指導、支援が重要であることが示唆された。

キーワード：聴覚障害，キャリア教育，コミュニケーション，エンパワーメント，セルフアドボカシー

1. はじめに

現在の厳しい雇用情勢の下、学生の資質能力に対する社会からの要請や、学生の多様化に伴う卒業後の職業生活等への移行支援の必要性が高まっている。この状況を受けて、文部科学省は大学設置基準を改正し、大学教育の一環としてキャリアガイダンス等の実施が義務づけられることになった。

このような中、本学においては、従前より就職や職場適応に関するガイダンス、セミナーを頻繁に実施しており、さらに学部教員によるきめ細かい就職支援や、障害者高等教育研究支援センター教員による個別面接指導などを行ってきた。開学以来の高い就職率は、その成果を示しているといえよう。しかし一方で、卒業生の職場適応に関しては多くの課題が示されており [5]、特に障害に起因した活動参加制限は、卒業生の離職や転職に結びつく要因になっていることが明らかにされている [6]。このような実態を学生に知らしめ、在学中に就労のためのレディネスを培うことは、本学におけるキャリア教育の中で目標とすべき重要な事項である。

そこで本研究では、平成 19 年度に実施した実施した卒業生調査の回答を詳細に分析し、キャリア教育に資する材料を得ることにした。

2. 方法

2.1　卒業生調査

平成 20 年 1 月に実施した「本学卒業生の職場適応に関する調査」[6] で得られた聴覚障害学生からの回答のうち、「職場適応に関する後輩に対するアドバイス（自由記述）」の記述内容を分析した。同調査は、筑波技術短期大学聴覚障害関係学科卒業生 752 名を対象に実施したもので、質問紙（郵送）および Web サイトから回答を得ている。回答者数は 149 名（郵送 92 名、Web 入力 57 名）、宛先不明の 92 名を除外した回収率は 22.6%であった。

2.2　記述内容の分類

KJ 法 [3] における取材内容分析の手続きを参考に、素材となる記述を内容の別に分類した。分類の手順は以下の通りである。

・まず回答者一人ひとりの記述を、内容の別に分解した。例えば「自身から相手にはたらきかける気持ちを持ち、積極的にコミュニケーションすることと、自分の障害をうまく説明する能力。これらが聴覚障害者にとって重要な能力ではないかと考えている。」という文章は、「周囲にはたらきかける意欲」「積極的なコミュニケーション」「障害を説明する能力」の3つに分解した。

・回答者全員の記述を分解した後に、共通した内容をグループ化し、各グループの内容を端的に表現するラベルを作成した。例えば上記の文章は「エンパワーメント」「コミュニケーション態度・方法・技術」「セルフアドボカシー」の各ラベルに分類した。なお情報保障に関しては、多くの回答者がこれに言及していたが、情報保障を要求、手配することの重要性を主旨とした記述は「セルフアドボカシー」に、情報保障の手法に関する説明は「情報保障の具体的方法」のラベルに分類した。

・ラベル毎の記述件数を算出した。

3. 結果と考察

図1は、回答者の記述を内容（ラベル）別に分類し、各内容を記した回答者の数を件数として示したものである。本稿では記述内容として比較的件数が多かったコミュニ

ケーション、エンパワーメント、セルフアドボカシーに焦点をあて、内容を検証した。

3.1　コミュニケーション態度・方法・技術

職場におけるコミュニケーションに臨む姿勢、態度として、「しつこいくらいコミュニケーションをとる」「コミュニケーションは1回で終わらせない」「納得出来るまで何回も繰り返し会話をする」といった内容が多く記されていた。また「業務に対する質問は、仕事に着手する前にした方がよい」という記述もみられた。コミュニケーションの問題は、聴覚障害者の活動参加制限の大きな要因としてあげられるが、職場におけるコミュニケーションの不足や誤解は、人間関係の不全や業務遂行上の失敗に結びつくということを、経験的に述べられているものと考えられる。

具体的なコミュニケーション方法としては、「いくら面倒でも通じないときは筆談が有効。下手に口話で済まそうとすると、最悪、間違ったまま物事が進行し時間を無駄に浪費するし、取り返しのつかない失敗をする。」に代表されるように、筆談を推奨する記述が多かった。また「メモを頻繁にとり相手の言った事を繰り返しオウム返しにすることで、確実にさせることが好ましい。」といったように、口話と筆談の併用に関する内容も多く記されていた。この調査では、別の設問において、職場で使用しているコミュニケーション方法を尋ねているが（多肢選択複数回答可）、この結果からは、ほとんどの回答者が複数のコミュニケーション手段を相手（上司、同僚等）に応じて選択、併用している実態が示されており、上記の記述はこの具体を説明したものであると言える。

この他、「PCを用いてチャット形式でやる」「IP チャットを導入しコミュニケーションを図る」といった、パソコンによるコミュニケーションについても数名が記述していた。聴覚障害系学科の卒業生の多くは、常時パソコンを使用する職務に就いていることが推測され、職場によってはチャットによるコミュニケーションが可能であることが分かる。

手話に関しては「手話で積極的に話しかけてみる。そうすると相手も少しずつ手話を吸収してくれる。」「手話を必要とするなら手話を教える技術を身につけること。」といった記述がみられた。前述のコミュニケーション方法に関する設問では、23%の回答者が“職場の親しい人”との会話におけるコミュニケーション手段のひとつとして手話を挙げており、この背景として職場の人々に対して手話の使用を啓発する努力がある様子がうかがえる。

3.2　エンパワーメント

エンパワーメントとは、市民運動に関連した文脈の中で構築された概念であるが、近年は障害者の社会活動参加に際して、障害に起因して自分たちに影響を及ぼす事柄を自分自身でコントロールできるようになることを意味する用語としても使用されている。本稿では、職場において周囲に積極的にはたらきかけることの重要性を主旨とした記述をこのラベルに分類した。

「基本的に受身では何も変わらない。」「自分から働きかけていく勇気と行動。」「自分から動かないと会社は変わらない。」といった記述が多数を占めていた。また「周りが助けてくれるのを待つのではなく自分で動く。」といった、仕事に関する心構えのラベルと重複することがらも記されていた。これらの記述内容は、障害の有無にかかわらず、一般的に個人が職業を通して自己実現をはかる際に求められる姿勢であるといえるが、本学卒業生の回答は、おもに障害に起因する活動制限のある環境の改善を意識して述べたものであり、障害のない人々と比較しても、よりいっそう自らを鼓舞し周囲にはたらきかけていかなければならない状況が職場にある様子が推察される。

3.3　セルフアドボカシー

セルフアドボカシーとは、社会参加の制約に対処するために必要な具体的支援を障害者自身が理解し、雇用者など周囲の人々に対して効果的に情報を提供する個人の能力のことである [1]。本稿では、障害啓発や情報保障に関する周囲へのはたらきかけに関する記述をこのラベルに分類した。

「見えない障害と言われているだけに、周りは自分の聴こえについて理解しづらいものです。自分は全く聴こえないのか?どこまでだったら大丈夫というものを最初に上長に相談しておけば、くよくよ悩まずにいられるかもしれない。」に代表されるように、自己の機能的障害や活動参加制限について周囲に説明することの重要性を述べた内容がもっとも多かった。「補聴器をつけているからすべて聴きとれると思われることが多いので、きちんと自分は聞こえないということを伝える。」「私とあの人は聴こえのレベルなどが違うので一緒だと思わないで下さい、ときちんと伝える。」といった記述は、一般の人々が聴覚障害を理解することの困難さを具体的に示している例といえよう。

情報保障に関しては、「情報保障に関して自分からはたらきかける事の大切さを身につける事。」「情報保障のためにはどうしたらいいのか、自分から積極的に調べたり聞きまわったりするのがいいでしょう。」といった内容が記されていた。このような記述からは、情報伝達について配慮された環境で学んだ本学卒業生の中には、就職して初めて情報保障の具体を提案することの重要性を実感する者が少なからず存在することが推察される。

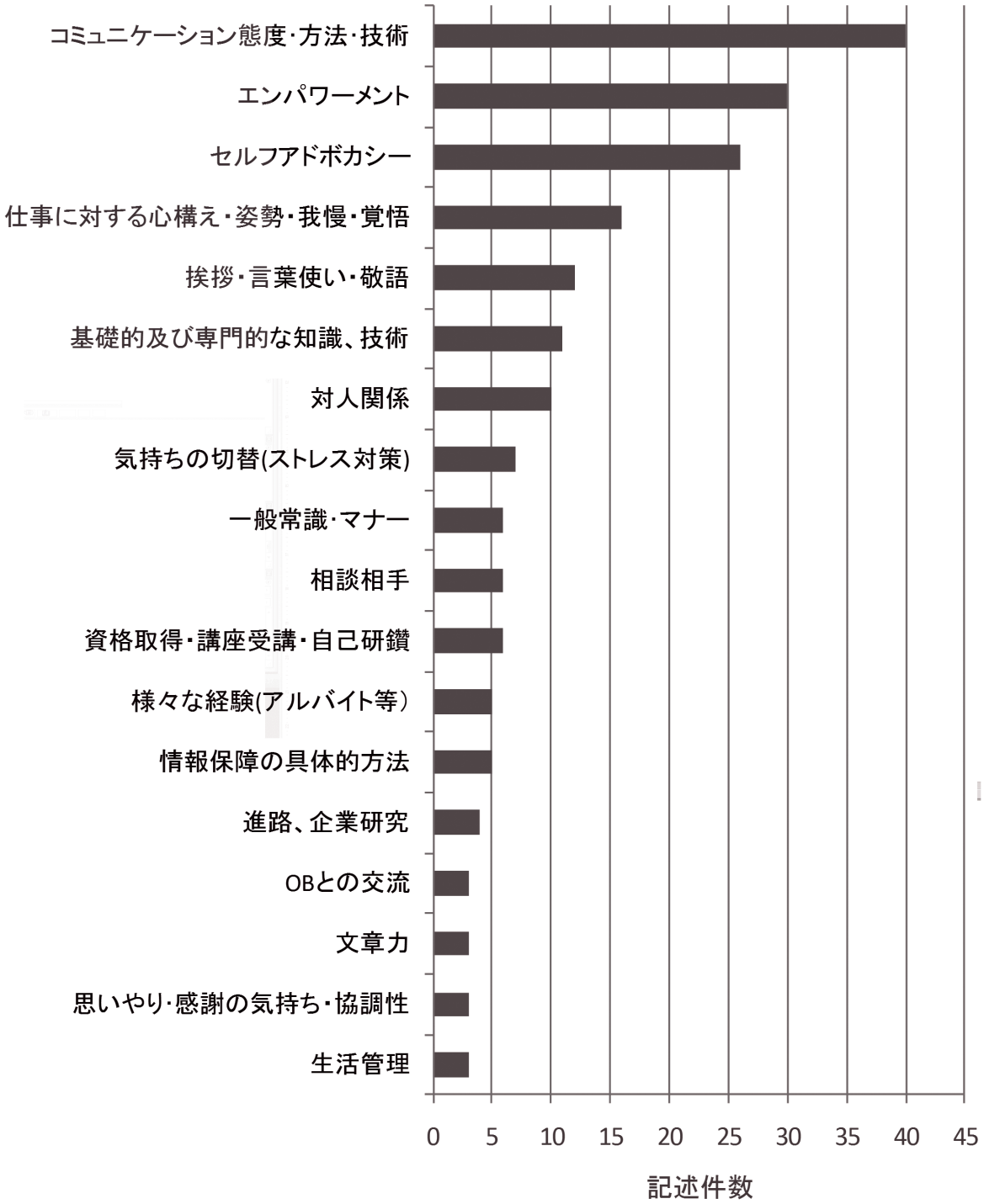

図１　障害内容（ラベル）別の記述件数

4. 総合考察

国立大学協会[4]は、大学においてキャリア教育を行うことの理由として、幅広い人間形成をはかることを目的とした社会人・職業人としての準備、学生の能力・資質に関する社会の要請、学生の就職や雇用への移行の面での支援強化、学生のキャリア発達や職業意識形成におけるつまずきの問題をあげている。本学は、これらの事項に加えて、キャリア教育においても障害を意識した内容を扱うことが求められている。四年制大学設置以降の教養系科目（障害関係科目）や就職ガイダンス、セミナー、個別指導等においては、従前よりコミュニケーション、エンパワーメント、セルフアドボカシーに関する具体的な指導、支援が行

われているが、本研究で明らかにされたことがらは、これらの教育活動の中に反映し活かされていくべきものであるといえよう。ただし学校という閉じた環境の中だけでは、キャリア学習に関する学生のモチベーションを高めることは困難であることが予想され、外部の組織や個人と連携した指導、支援の方法について、今後、さらに検討が必要であると考える。

参考文献

[1] Friend, M., & Bursuck, W.D. Including students with special needs (3rd ed.). Boston: Allyn and Bacon, 2002.

[2] 石原保志：筑波技術短期大学聴覚障害系卒業生の転職に関する意識. 筑波技術大学テクノレポート 17(1)：57-62, 2009.

[3] 川喜田 二郎：KJ法, 8 版, 中央公論社, 1990.

[4] 社団法人国立大学協会教育・学生委員会：大学におけるキャリア教育のあり方, 2005.

[5] 筑波技術短期大学：本学卒業生における職場適応の状況と生涯学習の必要性に関する調査研究. 1999.

[6] 筑波技術大学就職委員会：筑波技術短期大学卒業生の職場適応等に関する調査報告書. 筑波技術大学, 2009.

Suggestion for the career education from the response to survey of graduates

ISHIHARA Yasushi

Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired
Tsukuba University of Technology

Abstract: In the 2007 fiscal year, we have conducted the survey of graduates of our university about the place-of-work adaptation, and collected responses in order to feed them back to the career education in TUT. The replies on "the advice to the younger generation (free description) " were analyzed. We found that many graduates have some problems on how and with what manner to communicate with people, what empowerment they have in the course of their work, and how and where to make self advocacy at work. Based on the result of our survey, we suggested that in the career education in TUT the emphasis should be placed on these trainings and support should be also given to the career education.

Keywords: deaf or hard of hearing, career education, place-of-work adaptation, communication, empowerment, self advocacy